



日本統計学会 会報 2006. 1.25 No. 126

発行 日本統計学会
東京都港区南麻布4-6-7 統計数理研究所内
〒106-8569 Tel 03-3442-5801 Fax 03-3442-5924
編集責任 竹村彰通(理事長) / 前田忠彦(庶務理事)
栗原考次(広報理事) / 谷崎久志(広報理事)
振替口座 00190-2-61361
銀行口座 みずほ銀行広尾支店普通 1092212番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

1. 巻頭随筆「統計学と確率・数学、そして計算機」高橋 一... 1	6.1 「多重比較法の構築での諸問題」...道家暎幸... 7
2. 2006年度統計関連学会連合大会の企画進行状況矢島美寛... 4	6.2 「心理学と統計学」.....足立浩平... 8
3. 第74回大会へのお誘い.....佃 良彦... 4	7. 修士論文・博士論文の紹介.....10
4. 75周年記念事業「5月研究集会」のお知らせ竹村彰通... 5	8. 日本経済学会連合からのお知らせ...西郷 浩...11
5. 事務全面委託について.....山本 拓... 6	9. 研究部会の発足について.....11
6. シリーズ：統計学の現状と今後	10. 学会誌の機関購読等に関するお誘い.....12
	11. 評議員会議事録.....12
	12. 理事会議事録.....14
	13. 公募情報.....19
	14. 事務局から.....19

(財)統計情報研究開発センターへの事務全面委託について

去る2005年12月3日に開催された評議員会におきまして、本年4月1日より本学会の事務を全面的に財団法人統計情報研究開発センターに委託することが決定されました。なお引き継ぎ等の問題もあり、名目的な事務局は、当面は従来通り統計数理研究所におかれませう。

4月1日以降の事務関係の事項についての学会への連絡方法ですが、メールアドレスと電話番号は、そのうちに変更の可能性があります、当面は従来通りで結構です(こちらで自動転送します)。郵便物は、以下にご送付ください。

107-0062 東京都港区南青山6-3-9 大和ビル内

財団法人 統計情報研究開発センター 日本統計学会 係

このような決定に至った事情など、詳細につきましては6ページ「5. 事務全面委託について」をご覧ください。

1. 巻頭随筆「統計学と確率・数学、そして計算機」

高橋 一 (一橋大学)

統計学に始めて出会ったのは小学校や中学校で国勢調査の存在や“平均”等の言葉は聞いていましたが、授業として履修したのは大学1年の時に教養課程の「統計学」を履修した時です。その時

の印象は統計学とは何と詰まんものか、でした。今から思えば数理統計と記述統計がゴツチャになった、というより数理統計学が統計学を席卷しつつあった時代でしたので、数学でもなければ統計

学でもない、何やら中途半端なものだったのかも知れません。とは言うものの小生が実際に授業に出たのは2度だけ、試験前に教科書を慌てて読み二項分布から正規分布へ一足飛びに進むところが判らず往生した覚えがあります。

本格的に統計を学び始めたのは1968年に学部ゼミでMood-Graybillの入門書を読み始めた時から、その後大学院を経て既に30年以上経ちます。70年当時の日本は未だ数理統計学の全盛時にLehmannの検定論の教科書に代表されたような測度論的にキチンと纏め上げたものが統計学の正統だと我々(私?)は考えていた時代でした。勿論、当時から赤池先生を始め多くの統計学者はデータオリエンティッドな(まっとうな)統計学を研究していましたので、これは単に私の偏見が可成り強いとは思いますが、本格的に統計学を学ぶためには測度論を知らなければ駄目だと云う風潮は、特に某経済学部では強かったと思います。私も学部時代から半分独学で測度論や位相といった現代数学を勉強していました。今から思えば、解析や線形代数をもっと勉強しておけば良かったと思いますが、当時は現代数学を勉強の方が格好良く思えたものでした。大学院に入り早速飛びついたのが件のLehmannの教科書で、5月の連休に師匠鍋谷先生と刈屋さんの3人で箱根にある大学の寮に合宿し読んだ覚えがあります。当時の私の認識としては統計学は高度に数学的な学問と云う事でした。その後、73年にコロンビア大学に留学しました。ご存じの方も多いと思いますが、コロンビアの統計学科は第二次大戦中にWaldを招くためにHotelling等により創設されたという事もあり名称もDepartment of Mathematical Statistics、ドクターコースの標準的なカリキュラムでは週150分の測度論的確率論のコースを2年間履修することになっているなど他大学と比べ数理統計的な色彩の非常に強い所でした。更に、当時のコロンビアにはH.Robbins, Y.S.Chow, D.O.Siegmund, T.L.Lai, B.Singer等の確率論だか統計学だかよく判らない人達ばかり居ましたので、数学的な側面がより一層出ていたのでしょう。

所が74年にM.Kacによる統計学批判がある雑誌に載った時に面白いことが起きました。記事の題は“Dehydrated Elephant”と記憶していますが、「数学的に成りすぎた統計学は何の役にも立たない」と云う事が趣旨だったと思います。私から見るとKacのやっていた確率論も大差ないと思いましたが、当時コロンビアのFacultyの中ではかなり話題となったようです。特にRobbinsがKacに賛同し、授業でもこの話をしていた事を覚えています。同時にDepartment SeminarにDanielを招待したり、Applied Statへの傾倒を強めようという気持ちが見えてきました。一方、彼らが研究していた問題に関して「現在(70年代初頭)の確率論のレベルでは統計学の要求に応えられない」というような事を何度も言っていました。数学的に成りすぎ、現実のデータを説明する事を忘れた統計学がある一方、現実問題を解くには不十分な確率論と数学という問題を抱えていたという事です。世の中からは数理統計学のメッカと考えられていたコロンビアの内部からも伝統的な数理統計学に対する批判と疑問が持ち上がってきていました。

恐らく、当時そのような動きは全米各地で起きていたと思われます。ブレイクスルーの多くは、残念ながらコロンビアではなく西海岸から起きました。コンピューターの計算速度の向上と値段の下落により、それまで一般にはなかなか使えなかった時系列や多変量解析の手法が普及してきた、と同時にコンピューターインテンシブな手法が次々と考え出され実用化されてきました。70年代後半にはBootstrap (Efron), Classification and Regression Tree (Breiman, Friedman, Olshen, Stone), Projection Pursuit (Tukey, Friedman)といった新しい手法が提案され現実のデータに応用され始めてきました。特にBootstrapはアイディアの簡潔さにもかかわらず内容の深さは驚くべきものでした。此処でも面白いのは、これらの手法の提唱者達は全て統計学の中では最も数学的な所に居た人達です。数学と同時にデータを見る毎日が生み出した手法と云えます。Efronが大学院生に測度論を学ぶ事を禁止したと云う噂がボストンにま

で伝わってきたのも当時の話です。また、余り知られていない話と思いますが、現在計量経済学の世界でブームとなっているMCMC法の一つGibbs SamplerはGemanがMITの物理学科のドクターコースで、当時応用数学科に居たChernoffのアドバイスのもとに仕上げています。ここでも数理統計屋による貢献がありました。BootstrapやMCMCは難しい数学を知らなくても使えるし、有り難いことに答えが正しいかどうか別として答えが必ず出てくるという、正に魔法の方法です。EfronがBootstrapと命名したのもそこにありました。因みに、Bootstrapとは“靴べら”という意味で用いられているのではなく“Create something from nothing”という意味を持っているとのこと。この手の茶目っ気はアメリカ人の得意とするところでしょう。TukeyによるJackknifeという命名も似たようなものです。

この様な動きは大学院における統計教育にも大きな変化をもたらしつつあります。お陰で学生は数学や確率論に加えプログラミングにも泣かされることになった訳です。コンピュータの発展と普及（と云うより大規模な計算や情報処理を非常に安価に達成できると言った方が良いかも知れませんが）により正規性の仮定からの乖離も複雑な推定法により得られる推定量の分布も簡単に求まるようになりました。これは、数学という（無限の）宇宙の中では達成出来なかった事ですが、それをモンテカルロ・シミュレーションと経験分布関数との組み合わせによる（有限な）宇宙の中でいとも簡単にやり遂げてしまったと云えるでしょう。勿論、推定量の性質を理解するためには数学や確率論という道具が必要ですが、当面はコンピューターを用いる事で“答え”を常に得ることが出来るようになったわけです。この事は、同時にそれまでは到底手が付けられないと考えられてきた問題、その多くは莫大な量のデータを生み出す現象に関する統計解析が可能となってきたということ

です。

この流れは統計学をこれから学ぶ若い人たちは何を勉強すればよいかと云う問題を我々Older Generationへ投げかけてきます。研究者になるうとする大学院の学生に測度論を学ばせるべきか、コンピュータプログラムを覚えさせるべきか悩ましいところ。20年以上前にEfronがあっさり数学を切り捨てた(?)、そのときに育った人たちの現在を見る事が一つの答えになるかも知れません。勿論、二分法で片づくような簡単な事ではないでしょう。必要とされる数学の量と質が変化してきただけで数学を無視する事は出来ません。一方、コンピュータプログラミングにしても、大規模データに対応するための言語を中心にする必要があるでしょう。また、我々の若い頃より、コンピュータに関し学ばなければならない事が増えたという事でしょう。結局は、言い古された言い方に落ち着くしかありませんが、最先端を見通した人たちによるバランスの取れたカリキュラムの編成が望まれる。院生に与えられた限られた時間をどのように配分するのか、当然数学や確率のウエイトは下がるのでしょう。確率論や測度論の授業にしてもこれまでのように数学屋さん頼ってきた形では時間が足りなくなる。これからの統計学に一番必要なところをキチンと取り出し、学生にも判るように教えなければならないということになりつつありますし、もうその時代が既に来えています。

この30年間の統計学の変容は過去にないような大きなものだったと思います。その動きを見ながら過ごせたと云うことは或る意味幸運でしたが、付いていくことは至難の業です。私自身、個人的には途中からファイナンスの方へシフトしてきました。ファイナンスと統計学・確率論との関連も大きな動きになってきています。それについては、又の機会に触れたいと思います。

2. 2006年度統計関連学会連合大会の企画進行状況

2006年度連合大会企画委員会委員長
矢島 美寛 (東京大学)

2006年度統計関連学会連合大会は、応用統計学会、日本計量生物学会、日本統計学会の参加および日本行動計量学会、日本計算機統計学会、日本分類学会の協賛により、2006年9月5日(火)から9月8日(金)までの日程で、緑美しい「杜の都」仙台市東北大学川内キャンパスで開催されます。この連合大会用のWebページ

<http://www.jfssa.jp/taikai/>

を介して、今回も会員とのコミュニケーションをはかりたいと思います。また統計関連学会連合のホームページ (<http://www.jfssa.jp/>) にも関連情報が掲載されますので、ご参考願います。

現在、企画委員会で検討している企画内容を紹介いたします。市民講演会は少子高齢化社会へ向かいつつある国内状況に焦点をあて、「21世紀日本社会における人口統計および関連統計の役割(仮題)」を開催予定です。チュートリアルセッションは、企画委員会がテーマと講演者を選定し開催する予定です。コンペティションセッションは、過去3回の経験を踏まえ参加資格、審査方法、開催時間帯などを十分審議の上、今回も開催する予定です。

企画セッションは過去3年と同様公募することになりました。各学会の会員が一堂に会する貴重な機会ですので、会員同士が互いに啓発され、相乗効果が生まれるような企画を応募いただければ幸

いです。ただし応募多数の場合には企画委員会で調整させていただくこともありますので、ご了承願います。企画セッションの申し込みに際しては、セッションのテーマとねらい、オーガナイザーの氏名・所属・連絡先、予定講演者と演題名、必要な時間(プログラム編成上、90分から120分の間に願います)を2006年2月21日(火)までに

113-0033 文京区本郷7-3-1

東京大学経済学部

矢島美寛

yajima@e.u-tokyo.ac.jp

宛に郵便(当日消印有効)もしくは電子メール(17時まで)でお知らせ下さい。

一般講演の申し込み締め切り日については、事務を委託する業者と業務の量を打ち合わせ中で目下未定です。現時点では5月下旬を目途にお考え下さい。確定した期日は具体的な企画とともに2006年4月上旬頃第2報でお知らせいたします。

なお宿泊施設は斡旋いたしません。周辺のホテル情報などは可能な限り提供いたします。連合大会も今回で5回目です。年々充実した内容になっておりますが、今年度もさらに実りある大会になりますよう皆様のご協力をお願い申し上げます。

3. 第74回大会へのお誘い

2006年度連合大会実行委員会委員長
佃 良彦 (東北大学)

2006年度統計関連学会連合大会(日本統計学会としては、第74回大会)が日本統計学会、応用統計学会、日本計量生物学会の3学会の共催で2006年9月5日(火)~9月8日(金)の4日間に渡

り、仙台市の東北大学川内キャンパスで開催されます。私は同実行委員長の役をお引き受け致しました。本稿では会場となる東北大学および仙台市とその周辺を紹介致します。

東京の北約300キロにある仙台市は、東京駅から東北新幹線で約1時間40分の距離です。大会の行われる東北大学川内キャンパスは、仙台駅から樺並木の茂る青葉通を西に向かって2キロ程進み、広瀬川を渡った青葉山の麓にあります。この場所は仙台藩の城（青葉城）のあった場所に隣接しています。川内キャンパスは南が東北大学植物園、西が青葉山、北と東が広瀬川に囲まれた木々の緑豊かな場所です。川内は文科系研究科が中心のキャンパスですが、東北大学には他に片平丁、雨宮地区、星陵地区、青葉山キャンパスが仙台市内にあります。

仙台市は仙台平野の中心に位置し、1600年代初めに伊達政宗が開いた城下町として発展しました。江戸時代は伊達藩62万石と言われる東北地方の最大の外様大名でした。明治維新の際に、東北地方の諸藩は徳川幕府に付いたために明治政府からは冷遇されました。しかし、仙台は1889年（明治22年）に市制を施行し仙台市が誕生し、司法・運輸・通信などの政府機関や各種教育機関が仙台市に開設され「東北の治府」また「学都」となりました。市制開始当時の人口

は10万人に満たないものでしたが、市制100周年を迎えた1989年には東北地方で初めての政令指定都市に移行しました。1999年には人口が百万人を越え、東北地方の中核都市として今日に至っています。

仙台の西へ車で20分程のところには秋保温泉があります。山間の美しく静かな場所です。仙台市から東へ30キロ（電車で35分）行くと、日本三景の一つとして知られる松島に着きます。828年に建立された瑞巖寺には伊達政宗が再建した桃山文化の粋を集めた伽藍があり、瑞巖寺は伊達家の菩提寺にもなっています。さらに東に足を伸ばせば石巻、金華山にも連なります。仙台市の北へ新幹線で30分ほどすると平泉の中尊寺にいたります。奥州藤原三代のつわものどもの夢のあとを窺い知ることができます。江戸時代の俳人・松尾芭蕉が巡り、源義経伝説の由縁ともなった歴史の面影を偲びながら巡ってみるのも良いかもしれません。

皆様には、当大会参加の機会を利用して東北地方の自然と山海の味覚を是非味わっていただきたいと存じます。

4. 日本統計学会75周年記念事業「5月研究集会」のお知らせ

竹村 彰通（東京大学）

日本統計学会75周年記念事業

「21世紀の知識創造社会を支える統計科学の
現状と展望」

5月研究集会のお知らせ

75周年記念事業の第1回研究集会を以下のように企画しております。プログラムの詳細につきましては今後記念事業のホームページでお知らせします。ふるってご参加くださるようお願いいたします。

日時：2006年5月6日（土）、7日（日）

場所：東京大学本郷キャンパス（浅野地区）

武田ホール

プログラムの概要

[セッション名(仮)とオーガナイザ及び基調講演]

セッション1

「日本の統計制度の改革方向 - 戦後60年の歴史を
ふまえて」 舟岡史雄（信州大学）

セッション2

「人口減時代に向けた統計からの課題と展望」
小島宏（国立社会保障・人口問題研究所）

セッション3

「金融・保険の統計学」

国友直人（東京大学）

セッション 4

「情報量規準の展望」

小西貞則（九州大学）

セッション 5

「統計的因果推論と知識創造」

狩野裕（大阪大学）

基調講演 竹内啓 明治学院大学国際学部

5. (財) 統計情報研究開発センターへの事務全面委託について

山本 拓（日本統計学会会長）

．去る2005年12月3日に開催された評議員会におきまして、本年4月1日より本学会の事務を全面的に財団法人統計情報研究開発センター（以下、センターと略す）に委託することが決定されました。なお引き継ぎ等の問題もあり、名目的な事務局は、当面は従来通り統計数理研究所（以下、統数研と略す）におかれます。以下で簡単に、このような決定に至った事情を説明いたします。

永年にわたり本学会事務局は、統数研所属の2名の庶務理事と事務局員1名により運営されてきました。庶務理事の任期は2年で、着任時期が1年ずれており、1年目の理事の初年度は、2年目の理事からノウハウを受け継ぐかたちで、業務のスムーズな引き継ぎが行われていました。残念ながら昨年秋からは、統数研所属の新任の庶務理事を得ることができませんでした。また今後も統数研所属の庶務理事2名という体制を維持できる可能性は低い、という事態となりました。現在も他大学の若手に庶務理事をお願いしていますが、場所的な問題から、統数研所属の庶務理事と同様な仕事をこなすことは、難しいものがあります。

庶務理事1名と事務局員1名の2名という体制は、事務運営組織としては極めて脆弱と言わざるを得ません（特に引き継ぎの時期において）。さらに事務局員に関しては、永年務められていた経験豊富な関根氏は昨年4月に定年で辞められ、現在は新しい事務局員を雇用しています。当然のことながら、新任者に関根氏のような役割を期待するのは、現時点では無理なことです。ゆえにこの

際、学会事務局運営の経験が豊富な外部の組織に事務を委ねた方が、今後の学会事務の安定的な運営が可能であろうと判断しました。

そこで、本年4月よりセンターに事務を全面委託し、2年目の庶務理事の在任中に着実な業務の引き継ぎを図るということになりました。なおセンターは本学会にとっては、すでに馴染みの組織であり、現在も既に業務の一部（学会の名簿管理、会費納入の管理等）を委託しています。またセンターは現在、応用統計学会、日本計量生物学会、日本計算機統計学会の事務局を務めており、統計関連の学会の業務に関しては経験が豊富で信頼できると考えています。最後に財政的負担の問題ですが、事務を全面的にセンターに委託することで、本学会の負担は（移行期の付加的負担を除けば）従来の体制に比べて軽減することが試算の結果示されています。

会員の皆様には、永年の慣行からの変更で、色々とお不便をおかけすることになると思いますが、ご理解くださいますようお願いいたします。

なお4月1日以降の事務関係の事項についての学会への連絡方法ですが、メールアドレスと電話番号は、そのうちに変更の可能性があります。当面は従来通りで結構です（こちらで自動転送します）。郵便物は、以下にご送付ください。

107-0062 東京都港区南青山6-3-9 大和ビル内
財団法人 統計情報研究開発センター
日本統計学会 係

6. シリーズ：統計学の現状と今後

6.1 多重比較法の構築での諸問題

道家 暎幸（東海大学）

はじめに

最近、多重比較に興味をもち研究を始めました。以前より同時検定のための方法として理論的な関心はありましたが、研究に入った動機付けは、工学データの解析に直面したことです。研究のために多重比較に関係する専門書を探してみると以外に少なく、国内では永田・吉田（1997）統計的多重比較法の基礎、広津（2004）医学・薬学データの統計解析などがあり、海外では、Tukey（1953）The Problem of Multiple Comparisons, Hochberg-Tamhane（1987）Multiple Comparison Procedures, Hsu（1996）Multiple Comparisonsなどがあげられます。しかし、今までに多くの多重比較法が研究されていますが、これらの方法は個々の問題に対応した検定方式であり、それぞれの解析目的に適合できる場合は少なく、結局、新しい多重比較法を開発することになります。

本稿は、研究を進める過程で学んだ多重比較法の特徴や問題点を私なりに紹介したいと思います。もちろん、多重比較に関する現在までの研究動向を俯瞰したり、将来への展望を論評することは、初心者の中には難しく、それはこの分野での研究を極めた権威者に譲りたいと思います。

多重比較法

工学において、ある添加物の用量の増加に伴う反応の変化を調べるための用量反応試験や、開発されている標準薬に対し開発した新薬の有効性を比較するための臨床試験など多くの分野で多重比較法が用いられます。従来、多重比較法は、分散分析法によって複数の水準間に効果の差が認められたとき、どの水準間に効果の差があるかを見つけるために使われます。この問題を指定された有意確率の下で2母平均の差の検定を対の数だけ繰り返したとき、全体として有意水準が膨らむ多

重性の問題が生じ、検定の信頼度が低くなります。

Tukey（1953）はこの問題を解決するため、対比較のための全ての統計量の同時確率分布を用いて同時棄却限界を求め、母平均の差を全て検出する方法を提案しました。しかし、この方法は比較する回数が多いため、次元が増え同時棄却領域が広がり、検定結果が保守的になる欠点があります。Dunnett（1955）は、対照と他の水準との効果の差を対比較する検定方法を考案しました。Scheffe（1953）は、母平均間を重み付け係数による線形式で表す対比を用いて比較検定する方法を提案しました。一方、水準間に順序関係があり、各水準の反応が正規反応を示したとき、母平均列の傾向性仮説の下での多重比較法は、Bartholomew（1959）、Hirotsu（1979）等によって研究されています。このように種々な目的に応じた方法が開発されていますが、これらはシングルステップ法と呼ばれ、同時棄却限界をもとに母平均の差の仮説を全て同時検定する方法です。

これに対し、母平均についての全ての仮説を対象にして検定を始め、各ステップでの検定結果より、検定を中止するか継続するか判定し、ステップを進めながら対象となる仮説の数を減らし、有意な仮説を全て見つけ出すステップダウン法があります。Williams（1971）、Marcus et al.（1976）、Dunnett-Tamhane（1991）等によるステップダウン法の研究があります。最近、Dunnett-Tamhane（1992）は、統計量の小さい順にステップ毎に検定を行ないながら、効果が現れる最小用量水準を見つげるためのステップアップ法を提案しています。これらのステップダウン法とステップアップ法は、ステップワイズ法と呼ばれ、シングルステップ法に比べて検出力が高い方法として知られています。

これらの方法は、各水準で、ある反応が正規応答し、母分散は未知で等分散を仮定しています。

もし、等分散の仮定があやしい時は、Bartlettなどの等分散性の検定を用いたり、正規分布と見なせないときはノンパラメトリック法を用いた方がよいと思います。

構築での諸問題

多重比較での検定方式を構築する際、多くの問題が存在します。初めに仮説を設定しますが、両側検定か片側検定か、標準対照が有るか、用量反応試験が、母平均間に傾向性が有るかなど、比較の状態を考慮しなくてはなりません。次に仮説に対応した検定統計量を導出しなければなりません。通常は、最尤法で検定統計量を求めますが、多くは複雑な形の統計量が得られたり、その確率分布もわからない場合もしばしばあります。検定手順の検討も重要で、この検定方式の性能にも影響します。有意確率は、複数個の仮説を同時に扱うのでType I Familywise Error Rateで定義することになり、その有意確率の下で同時棄却限界を設定します。多重比較法での検出力の概念は、まだ確立されていません。全ての母平均の配置が定まった下で、母平均間に差のある全ての対を検出する確率である総対検出力、母平均間にある一定の値以上の差がある全ての対を検出する確率である制約付総対検出力などが、一般的に用いられる。これら棄却限界、検出力を得るため公式は同時確率分布の多重積分になりますが、通常、各統計量が互いに独立でないため積分計算が難渋します。そこで条件付分布を用いて簡単な確率分布の多重積分に誘導しますが、積分回数が増加し、計算が困難になる場合が有ります。この問題をモンテカルロシミュレーションを用いることで、かなりの計算精度が得られることも知られています。また、必要標本数を得るための計算手順の提案も必要です。検出力、必要標本数を決定の際、未知の母平均、未知の母分散に値を与えなければならないが、一般には経験的な情報をもとに、未知パラメータを推定することになります。

MCP2005に参加して

2005年8月17日から3日間、中国、上海で第4回多重比較国際会議（MCP2005）が開催されました。世界中から多重比較を専門とする研究者が一堂に集まり、20のセッション、70件程の発表が有りました。主なセッションは、ステップワイズ法などの多重比較の理論的な研究、用量反応試験での研究、Multiple Endpointsなど臨床医学での応用、変化点解析、False Discovery Rateに関するもの、特にマイクロアレイデータ解析などの研究発表が多く、この分野の研究に関心が高いことが見受けられました。このように、多重比較の研究は多岐に及び、最先端の研究が世界的に展開しているにもかかわらず、日本においては、この分野の研究者は少なく、多くの研究成果が得られていないように思われます。今回の多重比較国際会議を日本でという声が上がっております。今後、多重比較の研究者が増えることを期待しております。

6.2 心理学と統計学

足立 浩平（大阪大学）

心理学というと、一般には、カウンセリングなどに関係する臨床心理学の印象が強いように思われますが、こうしたイメージとはへだたる種々の分野があると同時に、いわゆる文科系の中では、理科系との接点が多い学問です。例えば、対象を知覚して記憶し思考するといった心の情報処理過程を研究する認知心理学は、情報処理体の模型というべき計算機の工学に先導されてきました。また、心の座は脳であることから、ラットなどの脳を研究対象にする、神経生理学と区別し難い分野がある一方、「日本の文化は他国と比較して初めてわかる」と同様に、チンパンジーなどと比較してこそヒトの精神機能を理解できることから、他種との比較心理学も重要な領域です。冒頭に言及した臨床心理学も、医学と深くかかわります。以上のような自然科学との関わりとは別に、心理学は統計学と深く関わります。この関わり方は、
統計法の利用（ユーザーとしての心理学）
統計法の研究開発（サイコメトリックス）

心の中の統計原理（数理心理学）

に三分できると思います。これら、、、、のそれぞれについて、現状、および、できれば今後を綴りたいと思います。なお、著者の現状は、「の研究に最大限の-effortを費やしたいと願いつつ、校務との教育に時間をとられ、までは余裕がない」といったところです。

統計法の利用 ユーザーとしての心理学

現代的な意味での心理学のはじまりは、150年ほど前とされますが、それ以来、人間の精神機能を「できるだけ数字で表す」という学風で多くの心理学分野は進んできました。うがった定義をすれば、心理学とは「ヒトの振る舞いをやたら数値化したがる人間学の一部門」と申せましょうか。従って、事例研究を除けば、ほとんどの研究で統計解析が利用されます。利用される統計法を乱暴に分ければ、「ANOVA」系か「多変量」系に二分されます。ここで、前者には二群の平均値差の検定も含め、後者は、多変量推測統計学ではなく、いわゆる多変量データ解析の諸方法を指しています。

上記の2つの系を比べると、心理学では、「多変量」系より「ANOVA」系の方がよく利用されます。その理由を記す前に、研究スタイルも二分して、「群間比較を行う実験系」と「変数間相関を求める調査系」に分けるのがよいでしょう。前者の実験系の方がむしろアカデミックな心理学の主流をなし、また、「学生にも最初に実験系のアプローチを学習させるべき」との教育方針から、ANOVA系のニーズが高いわけです。再び、うがった定義をすると、心理学は「ヒトを理解するのに、実験による仮説検証を重視する人間学の一部門」と申せましょうか。例えば、「睡眠時に忘却は起きにくいこと」を証明したければ、「単語リストを憶えて7時間眠った後、想起できた単語の数」を測定される睡眠群と、上記カッコ内の下線部を「7時間起きていた後」に変えて測定がなされる非睡眠群を設けた実験を行い、単語忘却数の平均値が群間で等しいという仮説を検定すること

になります。

こうした事情で、心理学専攻生全般を対象にした統計入門の授業では、比較的早くに（入門者にとって面白いとは、とても思えない）仮説検定法の基本を教え、その後、代表的な実験計画のもとでのANOVAを教えることになります。こうした仮説検定の偏重に対して、点推定や区間推定が心理統計教育では重視されない傾向があります。なお、区間推定については、「信頼区間を報告する習慣が根づいていない」という心理学の現状により、今後は徐々にニーズが高まると思われます。

統計法の研究開発 サイコメトリックス

心理学系分野の中でも、ユーザーではなく、統計法を提供する側の特殊な分野に話題を変えます。「心理データの統計解析法の研究や開発を行う分野、サイコメトリックスが私の専門です」と、これから専攻を決める2回生には申しております。サイコメトリックスとカタカナでいう理由は、「計量心理学」と直訳すると「計ることだけが専門」と勘違いされ、「心理統計学」と意識すると「やはり難しい統計学か」と敬遠されるからです。

サイコメトリックスに生まれ育った方法には、因子分析（FA）、構造方程式モデリング（SEM）や多次元尺度法（MDS）などがあり、主成分分析（PCA）、数量化法やクラスタリングなどにも独自の展開が見られます。これらの方法を見渡すと、前節の「ユーザーとしての心理学でANOVA系が重宝される」のとは異なり、「多変量」系が主流となります。

上記の「多変量」系は、さらに「確認志向」系と「発見志向」系に大別できると思います。前者はSEMや検証的FAなど、研究仮説の確認に用いる方法を、後者はクラスタリング、MDSやPCAなど、データに内在する群別や空間構造などを発見するための方法を漠然と指しています。ここ10年ほどのサイコメトリックスの動向を見ると、前者の「確認志向」系の方が、研究開発が盛んであり、ユーザーとしての心理学での利用頻度も高い状況です。現在はやや低調に思える「発見志向」

系については、非常にマイナーな現象ですが、例えば、3相PCAの研究論文が、物質内の構造発見の方法論としてChemometricsの学会誌に掲載されるという、いわば「サイコメトリシャンが、心理学ではなく、他の自然科学分野のツールを提供する」という面白い現象が見られます。

さて、100年前の歴史をみると、この時期は、サイコメトリシャンのスピアマンがFAを創案するとともに、統計学者のピアソンがPCAの基本構想に到っており、「多変量」系の基礎が次々と着想された時代です。FAは人間の知能の研究から生まれ、PCAもその後、統計学者のホテリングが心理学系雑誌に論文を書いていることから、心理学に深くかかわります。このように「多変量」系の方法が何となく心理学と関わりながら発展した動向の背景には、「物質だけでなく、生物も計れることに気づいた後、人も計れることに気づいた西欧の考え」が、20世紀初頭に（楽観の）頂点に達したことが在るようです。すなわち、その良否は別にして、人間測定への期待とでも表せる時代精神が、「多変量」系をはじめとした現代統計学の進展、および、「ヒトの振る舞いを数値化したがる学風」で進んだ心理学の進展に共通する「潜在変数」になったように感じられます。

心の中の統計原理 数理心理学

ここまでは「心のデータを分析するための統計解析」の話でしたが、「心 = 統計解析のプロセッ

サー」と見るのも面白いです。例えば、私たちが日常的に心の中で行う推論には、最尤法に近い過程が見られます。また、対象を知覚するプロセスは、「外界という母集団からのサンプリング」で表現でき、「知覚対象が何であるかの同定には、事前に頭の中にある知識が必須であること」はベイズ統計の枠組でうまく記述できるかもしれません。こうした観察を踏まえると、統計学で使われる数学的表現で心理過程を記述・説明できることが期待されます。

このように心を数学的に表現しようとするアプローチを、数理心理学と呼びます。これは、いわば「物理学」につく「物」を「心」に変えたような学問です。こうした学問の実現が1940 - 60年代頃には楽観視されましたが、そう簡単には行かないことがわかり、現在、数理心理学なる言葉は古語に近くなっています。

しかしながら、理工系の諸分野をみると、統計的なパターン認識、機械学習や逆問題の理論をはじめとして、そのまま、人の心理過程に当てはめられる枠組が散見されます。これらを心理学の中で集約させ、「心の中の統計原理」を探求すべく数理心理学を再興させることは、興味深い志向性に違いありません。

ここまで、心理学と統計学の3つの関わり方について、私見を述べさせていただきました。この機会を与えて下さった栗原考次広報担当理事に感謝します。

7. 修士論文・博士論文紹介

博士論文の紹介

- (1) 氏名 Md Nurul Haque Mollah
- (2) 学位名 博士（統計科学）
- (3) 取得大学名 総合研究大学院大学統計科学専攻

(4) 論文タイトル

Multivariate Analysis to Explore Latent Structure by Minimum Beta-Divergence Method

- (5) 主査 南美穂子（指導教官 江口真透）

8. 日本経済学会連合からのお知らせ

西郷 浩（日本経済学会連合評議員）

日本統計学会が加盟する日本経済学会連合では、例年通り平成18年度も加盟学会に対して国際会議派遣補助を支給します。応募者多数の場合、日本経済学会連合理事会が対象者を選考します。また、1回の募集につき1学会1件の応募が原則ですので、希望者が複数の場合には理事会で選考いたします。募集方法の詳細は日本統計学会事務局にお問い合わせください。

日本経済学会連合 国際会議派遣補助

(a) 目的：

加盟学会の会員が、平成18年4月1日から平成19年3月31日までに開催される海外での国際会議に出席する場合、往復渡航費・宿泊のための補助金を支給する。

(b) 補助額：

原則として開催地により6段階（15万円から40

万円まで5万円刻み）とする。

(c) 募集時期：

第1回：平成18年2月10日（日本統計学会事務局宛の締め切り）

第2回：平成18年5月末日（日本統計学会事務局宛の締め切り）

注）第2回は、第1回選考の結果、余裕定員があるときのみ応募する。

(d) 応募の条件：

派遣先の国際会議は申請学会が公認したものであること、申請学会よりの派遣者が同会議での報告者または討論者であること。被派遣者は、過去5年間、日本学術会議から派遣費を受けていないこと、また、当年度において、日本学術会議をはじめ他の期間から補助を受けていないこと。申請は、1回の募集につき1学会1件に限る。

9. 研究部会の発足について

2005年12月3日開催された評議員会において、下記の研究部会の発足が承認されました。

[部会名]

統計教育に関するカリキュラムと教育コンテンツの国際比較研究部会

[主査] 竹内光悦(実践女子大学人間社会学部)

[活動期間] 2005年12月から2年間(予定)

[連絡先]

〒191-8510 東京都日野市坂上4-1-1

実践女子大学人間社会学部

Tel : 042-585-7844 , Fax : 042-585-7835

E-mail : akitake@univ.jissen.ac.jp

[研究の主題]

日本と諸外国における統計教育のカリキュラムと教材コンテンツの国際比較

左記の他に下記の1部会が活動しております。

[部会名]

高次元データ解析法の開発と評価に関する研究

[主査] 若木宏文(広島大学大学院理学研究科)

[活動期間] 2004年12月から2年間(予定)

[連絡先]

〒739-8526 東広島市鏡山1-3-1

広島大学大学院理学研究科

Tel & Fax : 0824-24-7359

E-mail : wakaki@math.sci.hiroshima-u.ac.jp

本学会では研究部会の他に研究分科会も置かれており、現在3つの分科会が活動しております。分科会については随時募集しておりますので、身近な研究会活動をお持ちの方は応募をお考え下さい。

い。分科会規程は学会ホームページでも参照できます。

<http://www.jss.gr.jp/ja/subcommittee.html>

10. 学会誌の機関購読等に関するお誘い

事務局では日本統計学会誌の定期購読のお取り扱いをしております。個人、機関等を問わず1年分（欧文誌2号、和文誌2号）が9,000円です。公費による購入にも対応いたしますので、これを機会に統計関係の学科・教室等での機関購読を是非ご検討下さい。またバックナンバーについてのご相談にも応じます。

また韓国統計学会との協定により、両学会の欧文誌を交換（特別価格にて提供）しており、日本統計学会会員個人には、年2,500円で韓国統計学会誌を提供しております。国際交流に是非お役立

て下さい。韓国統計学会誌（Journal of the Korean Statistical Society）は年間4号が刊行され、1号あたり平均150ページというボリュームです。詳細は韓国統計学界ホームページ（<http://www.kss.or.kr/>）をご覧ください。こちらの公費購入等も承ります。機関購読の場合は13,000円/年とさせていただきます。

以上いずれも詳細は学会事務局へご照会下さい。

11. 評議員会議事録

2004・2005年度 第3回評議員会議事録

日時：2005年9月12日（月）19：30～21：00

場所：広島プリンスホテル 瀬戸内（大会D会場）

出席者：山本拓会長、竹村彰通理事長、評議員：伊藤彰彦、稲葉弘道、岩崎学、北川源一郎、木下宗七、国友直人、栗原考次、小西貞則、佐藤整尚、清水邦夫、杉山高一、田中豊、田村義保、道家暎幸、大戸隆信、樋口知之、広津千尋、藤井光昭、舟岡史雄、前田忠彦、丸山久美子、森棟公夫、矢島美寛、宿久洋、山口和範、渡辺美智子

（以上28名、委任状10通）

（オブザーバ：大瀧慈、黒住英司、駒木文保）

冒頭、会長より、評議員会の成立が宣言され、オブザーバ3名の参加が承認された。

報告事項：

議題1 第73回大会について

大瀧理事より、第73回大会の準備が順調に進んでいる旨の報告があった。

議題2 理事会からの報告

竹村理事長より、理事会からの報告事項および前回評議員会以降の会務などについて報告があった。具体的には、和雑誌の発行がおおむね順調に進んでいること、学会会員の推薦を行ったこと、連合が正式に発足したこと、官庁統計に対する緊急アピールが役立ったこと、秋の韓国統計学会に招待講演者を推薦したこと、事務局員の交代があったことなどが報告された。

議題3 日本統計学会賞、統計活動賞、統計教育賞受賞者について

山本会長より、資料に基づき各賞の受賞者について説明があった。

議題4 日本統計学会小川研究奨励賞受賞者について

山本会長より、資料に基づき小川研究奨励賞受賞者について説明があった。

議題5 各委員会からの報告

[学会活動特別委員会]

国友主査より、業績に関する賞の新設と秋期以外のイベント開催についての検討状況の報告があった。

[学会組織特別委員会]

欠席の垂水主査から、今回は特段の報告事項がない旨の報告があった旨が山本会長から説明された。

[統計教育委員会]

渡辺委員より、資料を用いて活動の詳細な報告があった。

議題6 入退会者の確認

入会者は回覧資料にて確認され、退会者数は前田評議員（庶務理事）より報告された。

議題7 その他

竹村理事長より、理事の交代について報告された。

山本会長より、夏期大学院構想について説明があった。

審議事項：

議題8 2004年度事業報告案、同決算案および会計監査について

佐藤評議員（庶務理事）より2004年度決算（案）および事業報告（案）が、舟岡監事より監査の結果がそれぞれ報告され、了承された。

議題9 2005年度事業計画案、同予算案について

前田評議員（庶務理事）より、2005年度予算（案）および事業計画（案）が説明された。会場より、名簿の作成には個人情報への配慮が必要だという指摘がなされ、佐藤評議員（庶務理事）より、個人情報については慎重に配慮を重ねた上で名簿を作成していることが報告された。本議題は、

75周年記念事業の準備金の件を除いて了承された。

議題10 総会の式次第について

前田評議員（庶務理事）より、資料により総会の式次第について説明があり、了承された。

議題11 第74回大会について

山本会長より、第74回大会は東北大学での開催が検討されていることが報告され、了承された。なお、会場より、大会の開催は週末を含めるなど、各大学の授業日程に配慮するべきであるとの意見があった。

議題12 名誉会員の推薦について

竹村評議員より、名誉会員の推薦があり、了承された。

議題13 学会創立75周年記念事業について

杉山委員長より、資料により学会創立75周年記念事業について説明があり、了承された。これに伴い、75周年記念事業に関する2005年度予算（案）および事業計画（案）が了承された。また、60周年記念基金と75周年記念事業の関係については、執行部に一任することが了承された。

議題14 庶務理事の交代の状況について

竹村理事長より、統計数理研究所から新しい庶務理事が選出されなかった経緯について報告があった。

議題15 学会事務局のあり方について

山本会長および竹村理事長より、統計数理研究所の今後の移転に関連して、外部委託を含めた学会事務局の今後のあり方について検討をする必要があることが説明された。会場から、他の学会でも同様の問題が起きているので、幾つかの学会に問い合わせる状況を把握した方がよい、という意見があった。また、統計数理研究所と統計学会の関係のあり方について検討すべきである、という

意見があった。山本会長より、次回評議員会で具体的な対策案を議論することが提案され、了承された。

議題16 その他

次回評議員会は2005年12月3日に開催される予定であることが表明された。

12. 理事会議事録

2004・2005年度 第5回理事会議事録

日時：2005年7月16日（土） 12：00～15：00

場所：統計数理研究所 会議室

出席者：山本拓会長、竹村彰通理事長、大屋幸輔、栗原考次、宮川雅巳、大瀧慈、西郷浩、田村義保、汪金芳、佐藤整尚、前田忠彦、丸山祐造

報告事項：

議題1 会長、理事長からの報告

[会長]

山本会長より、学会活動特別委員会に1) 研究業績賞の継続検討、2) 春季大会開催の可能性、の2案件の検討を依頼した旨の報告、また3) 統計関連学会理事会で、単位互換を含む協同の大学院教育コース(夏期大学院構想)に関する協力依頼が統計数理研究所からあった点の報告があり、意見交換を行った。

[理事長]

竹村理事長より、統計関連学会連合理事会の活動状況と検討事項に関する説明があった(広島大会での連合関連企画セッション、2006年度大会の開催形態と開催校の推薦、今後の連合大会の位置づけ等)。また学会の75周年記念事業について事業委員長を杉山高一元会長にお願いし、評議員会での了承を経て委員会が発足したことの報告があった。前会長の名誉会員推薦への対応を岩下理事に依頼したとの説明があった。

議題2 各理事からの報告

[編集(欧文誌)]

田中理事からの以下の事項に関する書面報告があった。1)「小川研究奨励賞」候補者の選考。

2) 欧文誌第35巻第1号の発行と第2号の編集状況、2005年1月からの論文投稿数の傾向と日本人の投稿を増やす努力の必要性、3) SciPress社に依頼している欧文誌電子アーカイブについて、科研費の申請などによる協力や今後の情報提供サービス方策の検討の必要性。1)について授賞が承認され、各学会賞の授賞と合わせて理事会での準備体制を検討した。賞状作成を和文誌編集理事が担当することになった。

[編集(和文誌)]

鎌倉理事からの第35巻J1号の編集状況と発行見込みに関する書面報告があった。田村理事から、第35巻J2号の特集号企画内容に関する補足説明があった。理事会の交代時における編集委員会の引き継ぎ方法についての意見交換を行った。

[広報(会報・ホームページ)]

会報担当の大屋理事から、会報第124号を予定通り発行見込みである旨、広報理事の後任として谷崎久志会員に依頼した旨の報告があった。

ホームページ担当の栗原理事より、ウェブページの更新状況報告と、サーバー委託に関しては連合のウェブ委員会の動向を伺いながら決めたいとの報告があった。

[大会(企画・運営)]

宮川理事(企画委員長)より、大会プログラムがほぼ確定し、予稿提出状況も良好である旨報告があった。チュートリアル、シンポジウムの企画等と発表件数に関する概要が説明され、西郷理事からプログラム編成に関する大会企画委員会での議論の紹介があった。

西郷大会企画担当理事より、経済学会連合に複数学会が共同開催する会合への補助金を今年度連合大会について申請し認められたとの報告があった。またその会計処理方法を確認した。

大瀧大会運営担当理事より、準備状況（ポスター、会場等）について報告があった。

[渉外]

国友理事から、来年度の連合大会開催校が東北大学に決定した経緯についての書面報告があった。

汪理事から、連合大会の英文ページ経由で講演を申し込んだ海外研究者が一名いたとの報告があった。

岩下理事からの書面報告事項3点が代読された：1) 入会案内文書の確定と7月会報への同封、2) ジャーナルの電子化関連で様々な団体からコンタクトがあるので、統計学会として対応方針策定の必要性、3) 科学技術振興機構のジャーナル・アーカイブ化に関する補助金への応募。

田村理事より、統計数理研究所と統計教育委員会との共催の公開講座の可能性を検討中である旨及び11月に開催される第一回横幹連合コンファレンスについて本学会から竹村理事長と栗木哲会員が講演予定との説明があった。また学会企画による科研費の申請に関する検討状況が説明された。

[庶務]

前田理事より、日独分類会議、情報論的学習理論ワークショップ (IBIS2005)、日本行動計量学会大会の協賛、及び全国統計教育研究大会の後援をメール回覧にて承認したとの報告があった。今年度の大内賞の推薦を見送ったが今後は要検討である旨が説明された。

佐藤理事より、連合大会事務局の業務の進捗状況とホームページでの事前受付の対応について報告があった。

審議事項：

議題3 研究集会に関する協賛等の方針につい

て

会員から依頼のあった科研費による国際会議2件 (“ Latent Structural Modelling and Analysis for Spatio-Temporal Data ” および “ Bayesian Applied Multivariate Analysis ”) への協賛を承認した。今後も規模の大きい科研費等による国際研究集会については、金銭的な負担がないことを条件に協賛する方針を確認した。

議題4 評議員会・総会議題について

前田理事より、評議員会での理事会報告事項及び総会議題について案が示され、評議員会への検討依頼事項などについて意見交換を行った。

議題5 予算・決算案

佐藤理事から2004年度決算案の説明があり、評議員会への提出が承認された。前田理事から、2005年度活動計画案、2005年度予算案の説明があり、小改訂を経て評議員会へ提出することが承認された。

議題6 庶務理事の交替について

丸山庶務担当理事から黒住英司会員(一橋大学)への交替が承認された。夏の評議員会までに佐藤理事の後任の人選を進めることになった。

議題7 ジャーナル電子化及び関連事項に関する方針

ジャーナルの電子化を促進させるため、平成18年度科研費研究成果公開促進費(データベース)への応募を岩下理事が担当することになった。現在複数のサイトで電子ジャーナルを公開している点と各サイトでの課金の考え方について相互調整を進めること、電子的情報提供サービスの充実についてSciPress社と今後も協議を進めることなどを議論した。

議題8 名簿改訂

名簿改訂に際する掲載項目について、個人情報保護と名簿としての有用性の観点から審議し、編

集の基本方針を決定した。

議題9 入退会者の承認
資料が回覧され入退会者が承認された。

議題10 その他
各種団体等からの賞の推薦依頼への対応方針、今後の事務局の体制と業務の外部委託の可能性等について議論した。

2004・2005年度 第6回理事会議事録
日時：2005年10月1日（土）12：00～15：00
場所：統計数理研究所 会議室
出席者：山本拓会長，竹村彰通理事長，西郷浩，宮川雅巳，大瀧慈，栗原考次，国友直人，汪金芳，岩下登志也，田村義保，前田忠彦，駒木文保，黒住英司（以上13名）

報告事項：
議題1 理事長からの報告
竹村理事長より，第73回大会中に出席の理事の間で今後の方針について話しあったことの経緯が報告された。

議題2 各理事からの報告
[欧文誌]
欠席の田中担当理事に代わり，前田理事から，欧文誌への投稿状況について説明があった。

[和文誌]
欠席の鎌倉担当理事に代わり，前田理事から，和文誌への投稿状況および今後，特集を組む予定である旨が報告された。また，前田理事より，和文誌・欧文誌双方にそれぞれの編集委員の名前を掲載する必要性が指摘され，各担当理事に連絡することが確認された。

[広報]
栗原担当理事より，12月下旬に会報125号が発行される予定であることが報告された。

[大会運営]
大瀧担当理事より，第73回大会が滞り無く終了したことが報告された。

[渉外]
国友担当理事より，2006年の連合大会が東北大学で開催される予定であること，2007年に関しては未定であるものの，連合大会として大会が開催される可能性があることが報告された。

岩下担当理事より，電子ジャーナル化に関する科学技術振興機構への補助金申請が不採用となったこと，ホームページへの大量アクセスなど悪質なアクセスに対する情報学研究所からの対処策の照会について報告があった。また，検索エンジン用の電子ジャーナルのキーワードについて，回覧資料を参考にしながら各理事に意見を求めた。

汪担当理事より，英文ホームページを段階的に充実させていく旨が報告された。

田村担当理事より，科学研究費補助金についての現状が報告された。

[大会企画]
西郷担当理事より，第73回大会（連合大会）でのチュートリアルおよび企画セッションの結果について報告があった。

宮川担当理事より，会報掲載資料に基づき大会への参加者数および今後の検討課題について報告があった。また，報告集の事前閲覧については，特許との関連に注意して今後検討すべきであるという意見があった。

[庶務会計]
前田担当理事より，入会者および退会者について報告があった。また，駒木担当理事および黒住担当理事の紹介があった。

議題3 第73回大会報告
前田理事より，大会事務局での業務内容などについて説明があり，庶務会計と大会事務局の担当

者は時間制約上、別々の理事が担当すべきであることが指摘された。また、連合大会の収支決算を連合大会参加学会の会員に報告する必要があるという意見があり、連合の理事会に検討を依頼することになった。

議題4 第73回総会報告

前田理事より、資料により第73回総会について報告があった。

審議事項：

議題5 理事の会務分掌について

前田理事より、会務の分掌および今後の会務日程に関して資料に基づいて説明があり、了承された。

議題6 2006年度連合大会の事務局対応について

竹村理事より、2006年度連合大会には統計学会より2名の事務局員を選出する必要があることが説明され、数名の候補者が挙げられた。

議題7 外部機関・他学協会等からの依頼への対応について

[統計数理研究所からのリスク研究ネットワーク参加依頼について]

竹村理事長より、資料に基づいてリスク研究ネットワークへの参加依頼について説明があり、理事会としては前向きに対応することが了承された。また、本件に関しては、評議員に説明資料を送ることが提案され、了承された。

[横幹連合からの依頼事項]

横断型基幹科学技術研究団体連合より、統計学会としてのキャッチフレーズを決めるよう要請が来ており、「日本の統計学75年の蓄積」とすることが決められた。

議題8 次回評議員会の準備について

前田理事より、資料に基づいて次回評議員会で

の議事次第案が説明され、了承された。

議題9 今後の会務日程について

前田理事より、今後の会務日程に関する紹介があり、第7回および第8回の理事会開催日を複数の候補日の中から選出することが了承された。

議題10 入退会者の承認

回覧資料により入退会者について説明があり、了承された。

議題11 その他

夏季大学院構想に関する統計数理研究所の対応、名簿改定の作業日程と名簿への記載事項、ジャーナル電子化に関する予算とコンテンツ・アラート・サービス、学会関係メールアドレスの変更などについて意見交換を行った。

2004・2005年度第7回理事会議事録

日時：2005年12月10日（土）11：30～14：30

場所：統計数理研究所会議室（所長室前）

出席者：山本拓会長、竹村彰通理事長、田中勝人、西郷浩、今野良彦、栗原考次、谷崎久志、汪金芳、田村義保、前田忠彦、黒住英司、駒木文保（以上12名）

報告事項：

議題1 会長からの報告

山本会長より、評議員会に関する報告があった。

議題2 理事長からの報告

竹村理事長より、2006年度連合大会事務局員として統計学会より、佐藤整尚氏及び今野良彦理事を推薦したとの報告があった。第1回横幹連合コンファレンスでの会長懇談会の報告があった。

議題3 各理事からの報告

[欧文誌]

田中担当理事より、35巻2号が12月に順調に発

行される予定であることが報告された。

[和文誌]

欠席の鎌倉担当理事に代わり、前田理事から9月発行予定の35巻シリーズJ第1号の発行が2ヶ月遅れたこと、及び2006年3月発行予定の35巻シリーズJ第2号の編集状況が報告された。

[広報(会報)]

栗原担当理事より、会報126号の編集状況が報告された。

[広報(ホームページ)]

谷崎担当理事より、ホームページに和文誌、欧文誌の編集委員を載せるにあたり、委員の任期についての確認があった。

[渉外]

欠席の岩下担当理事に代わり、黒住理事から、今年度、科研費のデータベースでの申請を見送ったことの報告があった。論文の電子的な公開のあり方について議論がなされた。

汪担当理事より、日本統計学会の英文パンフレットについて提案があり、作成を進めることになった。

[大会企画]

西郷郷担当理事より、11月12日に開催された第1回企画委員会について報告があった。

大会事務局担当の今野理事より、連合大会事務局の立ち上げについて報告があった。

[庶務会計]

駒木担当理事より、科研費・研究成果公開促進費・学術定期刊行物への応募申請を行ったことの報告があった。

前田担当理事より、取り次ぎ会社から、日本に留学して現在は帰国した元留学生に、希望する学会誌を国の予算を用いて2年間送付する制度を利

用して、2年間統計学会に入会して学会誌を入手する手続きの代行を会社が行えるかどうかについて問い合わせがあったと報告があった。同様のケースについての今後の対応は検討することとし、今回については学会誌の通常の販売を行うことで対応することになった。パシュリエーファイナンス協会第4回世界会議の協賛の依頼について協賛する旨の回答したことの報告があった。

議題4 その他

なし。

審議事項:

議題5 75周年記念事業に対する理事会の協力体制について

理事会として75周年記念事業について協力をして行くことになった。

議題6 他機関からのアンケート協力依頼への対応について

アンケート協力依頼をメーリングリストに流すという形であれば協力が可能であると回答することになった。

議題7 事務局の業務委託とそれに伴う準備について

事務局の業務委託について評議員会で認められたことの報告があり、業務委託の準備とそれに伴う問題について検討した。

議題8 入退会者の承認

入会7人(正会員1人,学生会員6人),退会6人を承認した。

議題9 その他

統計学会として、春季に独自の集会を開催するかどうか、60周年記念基金の今後の運用等について議論した。

13. 公募情報

財団法人 放射線影響研究所 統計部研究員公募

1 職種：単独または共同で研究を行う研究員若干名

2 手当等：給与優遇；研究費支給（外部資金申請も可能）；国際的および学際的環境で勤務できる；理論上および応用上の問題に関する国際的な共同研究が可能。

3 研究内容：本人の興味に基づく方法論的研究や、疫学者・生物学者・臨床医との共同研究で、特に放射線被曝の長期的影響ならびに放射線と遺伝子・生活習慣・環境との相互作用を中心とした人体に対する健康影響の研究。具体的な作業内容は、研究計画の策定・データ解析・数理モデル作成・報告書の作成・口頭/論文発表。

4 応募資格

a. 応用統計，できれば特に生物統計における研究（例えば一般化線形モデルおよび最近のモデル拡張）に経験と強い興味があること。

b. 数理統計または生物統計の博士の学位，あるいはそれと同等の経験があること。

c. 次の分野で一つ以上の経験があること：リスク推定又はハザード関数モデリング，経時的データ解析，疫学研究の計画と解析（コホート内症例対照研究，遺伝子環境交互作用），生物情報学

d. ある程度の英会話能力があること。

5 提出書類

a. 履歴書〔電子メールアドレスを記入すること〕

b. 職歴及び研究業績

c. 研究に対する抱負と目標（A4で1ページ程度）

d. 主要論文別刷り（5編以内）

6 応募期間

2006年12月31日まで

7 問合わせ先

〒732-0815

広島市南区比治山公園5-2

財団法人 放射線影響研究所

統計部 部長代理 John Cologne

Tel：082-261-1957（内線602）

Fax：082-262-9768

E-mail：jcologne@rerf.or.jp

8 書類提出先

〒732-0815

広島市南区比治山公園5-2

財団法人 放射線影響研究所

統計部 芝 伸子

14. 事務局から

理事会の現メンバーについて

昨年9月の大会を期に一部のメンバー交代があり、理事会のメンバーと役割分担は現在下記の通りとなっております。

山本 拓会長，竹村彰通理事長，田中勝人（会誌編集欧文）鎌倉稔成（会誌編集和文）西郷 浩（大会企画），今野良彦，（大会企画）栗原考次（広報：会報），谷崎久志（広報：HP），中野純司

（情報），国友直人（渉外），汪 金芳（渉外），岩下登志也（渉外），田村義保（渉外）佐藤整尚（大会担当），前田忠彦（庶務会計），駒木文保（庶務会計），黒住英司（庶務会計），酒折文武（幹事：HP）

投稿のお願いとお知らせ

統計学の発展に資するもの、会員に有益である

と考えられるものなどについて原稿をお送りください。新刊の紹介なども歓迎いたします。

来日統計学者の紹介につきましては、訪問者の略歴、滞在期間、滞在先、世話人などをお寄せ下さい。さらに、求人案内（教員公募）なども受け付けております。

できるだけe-mailによる投稿、もしくは、文書ファイル（テキスト形式）の送付をお願い致します。

原稿送付先

〒700-8530 岡山市津島中3-1-1

岡山大学大学院環境学研究科 栗原考次 宛

Tel : 086-251-8832 (ダイヤルイン)

Fax : 086-251-8832

E-mail : koho@jss.gr.jp

(統計学会広報連絡用e-mailアドレス)

学会費自動払込の問合せ先

学会費自動払込問合せの旨とともに、氏名と住所を以下にお伝えください。手続きに必要な書類が送付されます。

〒107-0062 東京都港区南青山6-3-9

大和ビル内財団法人統計情報研究開発センター
日本統計学会係

TEL : 03-5467-0481 , FAX : 03-5467-0482

E-mail : jstatoc@sinfonica.or.jp

退会者

浅見真一, 工藤政信, 薬師寺裕, 中島隆信, 要司,
河野稔果, 金子芳久, 花田恭, 川名部友乃, 吉田
忠, 石塚貴広

現在の会員数 (2006年1月20日現在)

名誉会員	25名
正会員	1450名
学生会員	86名
総計	1561名
賛助会員	17法人
団体会員	4団体

- ・統計学会ホームページURL :
<http://www.jss.gr.jp>
- ・統計関連学会ホームページURL :
<http://www.jfssa.jp>
- ・住所変更連絡用e-mailアドレス :
meibo@jss.gr.jp
- ・広報連絡用e-mailアドレス :
koho@jss.gr.jp
- ・その他連絡用e-mailアドレス :
shom@jss.gr.jp